

<研究ノート>

初年次必修科目「日本語A」「日本語B」に関する 報告と検討

金久保紀子*・亀田 千里**

A Report on Practical Japanese as the First Year Required Subject

KANAKUBO Noriko* and KAMEDA Chisato**

1. はじめに

本学に経営情報学部ができた2010年度から、1年次の必修科目として「日本語A」および「日本語B」という科目が開設された。この科目は、高校までの「国語」というアプローチではなく、大学入学直後から、ツールとして不可欠である日本語を分析的に見直し、大学での学習活動につなげる、という意図のもと、設置された科目である。

現在、多くの大学では、初年次教育、あるいはリメディアル（補習）教育に取り組んでいる。文部科学省が2011年（平成23年）に発表した調査報告¹⁾によると、2009年（平成21年）に初年次教育に取り組んでいる大学は、617校（全大学の84%）にもものぼっている。そのうち、レポートや論文の書き方等文章作成関連の内容を取り上げている大学は86%、プレゼンテーションやディスカッション等の口頭発表の技法関連を扱っている大学

は79%という結果が得られている。この調査結果から、多くの大学が、文章作成の方法、口頭発表の技法のような内容を大学1年生に対して指導する必要があるという意思を持っていることがわかる。それぞれの大学が取り組んでいる科目の内容は、リメディアル的な内容から、実際のレポートや手紙の作成など具体的なことに至るまで、かなり多様であることがわかっている。

本稿では、必修科目「日本語A」および「日本語B」の内容を振り返り、その内容を検証すること、そして本学の学生に適した授業内容を検討することを目的とする。

2. 科目概要

検討対象とする「日本語A」および「日本語B」は、経営情報学部の総合教養科目群教養基礎科目として位置づけられ、英語・数学と共に、1年次の必修科目となっている。卒業単位数124単位中、4単位（各科目半期

* 情報コミュニケーション学部国際交流学科、Tsukuba Gakuin University

** 経営情報学部経営情報学科、Tsukuba Gakuin University

2単位)である。

経営情報学部が設置される際、科目としての「日本語」が必修となったのは、入学時に日本語を使いこなす力が必ずしも十分ではない学生がいることに考慮し、大学での学習、また大学生活一般に必要な日本語力を入学後の早い段階で身につけることが適切であると判断されたためである。高校までの教科としての国語のように文章の読解や鑑賞を扱うためではなく、大学で学ぶためのツールとしての日本語力の育成を目指している。「日本語A」は話すことに主眼をおいた授業内容で、「日本語B」は書くことに主眼をおいた授業内容で実施することとなっている。

筆者らは、科目担当者として、この科目のデザイン・運営・評価をする立場にある。科目担当者は外国人に対する日本語教育を専門としてきた専任教員2名である。

2005年(平成17年)から2009年(平成21年)まで、情報コミュニケーション学部国際交流学科において、1年生対象の必修半期科目「入

門ゼミ2」が開設されていた。「入門ゼミ2」も、レポート作成の基礎など、大学において必要な「書く力」の育成を目指していた²⁾。

この「入門ゼミ2」での経験および、大学で学生に要求される「話す力」育成のための活動を加えた内容で「日本語A」および「日本語B」のデザインを行った。一般的な教養の授業とは異なり、学生が自らの日本語の力を評価したり、グループでの活動を通して互いに学び合ったりするような仕組みを作った。

シラバスには、以下の表1、2のように記載している。

両授業ともに、授業への出席に重きを置いた評価をするとともに、授業中の課題を40%の評価とした。授業中の課題に関する評価は、授業時に配付した文書・資料、および添削して返却したワークシートなどを綴じこむファイル(ポートフォリオ)の提出をもって行うこととした。

表1 2012年日本語Aシラバス

授業の到達目標：①自分の「話す力」を自覚し、不足している部分を伸ばす。②聞き手を意識して話すことができるようになる。
授業概要：日本語の豊かな使い手になるために、主に話す力を伸ばすためのトレーニングを行う。大学生活に欠かせないアカデミックな場面を想定した練習を通じて、聞き手を意識しながら目的に応じた話をする力を身につける。
評価：出席 40%、授業中の課題 40%、授業への取り組み 20%

表2 2012年日本語Bシラバス

授業の到達目標：①自分の「書く力」を自覚し、不足している部分を伸ばす。②読み手を意識した文章が書けるようになる。
授業概要：日本語の豊かな使い手になるために、主に書く力を伸ばすためのトレーニングを行う。大学生活に欠かせないアカデミックな場面を想定した練習を通じて、語彙や表現に注意しながら読み手を意識した文章を書く力を身につける。
評価：出席 40%、授業中の課題 40%、授業への取り組み 20%

3. 授業報告

本章では、具体的な授業内容について、検討を行う。

3.1 日本語 A について

「日本語 A」は話す力を伸ばすための科目である。初めて会った新生同士が、よい関係を築くと同時に、高校までの学習活動ではあまり深く学ぶ機会がなかったと思われる自分の話し方の特徴を知ることが、授業の活動を通じて行う方針を取った。また、聞いている人がある、自分一人で話しているのではない、ということを強調し、聞き手に伝わる話し方を意識するよう指導した。グループでの活動の時間を多く取り、自分の話し方がどのように伝わったか、グループのメンバーからのフィードバックが得られるようにした。

2012年度のスケジュールおよびその内容は以下の通りである（カッコ内は授業回数）。

- 1) オリエンテーション：
授業の目的・方針を明確にする（1回）
- 2) 自己紹介（1回）
- 3) 図書館ガイダンス（1回）
- 4) 説明をする（2回）
- 5) 意見を述べる（2回）
- 6) 外部講師による講義（1回）
- 7) インタビュー（6回）
- 8) まとめ、授業の振り返り（1回）

2) 自己紹介は、1年生の新学期には欠かせない活動である。入学式後、ガイダンスが続き、あわただしい中、必修の授業時にはじめてクラスメートと小さなグループで話し合う機会となる。活動は、自己紹介→グループ内評価→改善→もう一度自己紹介→グループ評価、という流れで実施した。

3) 図書館ガイダンスは、1年生にとってまだ馴染みがない、大学図書館の一般的な利

用方法や情報検索の方策を紹介することを目的として行った。

4) 説明をする、では、身近な事柄（自分の部屋）を説明しながら、聞き手に絵を描いてもらう、という活動を行った。相対的な表現や、毎日見ている事物の描写の難しさを感じるとともに、自分の説明の善し悪しを、聞き手の絵を通して知ることができた。

5) 意見を述べる、では、自分の立場を決めて、あるテーマについて具体的な根拠を出しながら自分の意見を伝える、相手の意見を聞いてさらに自分の意見を深める、意見のやりとりを客観的に聞いて評価する、という活動を行った。

扱ったテーマは、以下の通りである。

- A：小学生に携帯電話は必要か
- B：高校を義務教育にするべきか
- C：飲酒の年齢制限を「20歳」から「18歳」に引き下げるべきか
- D：電車内で化粧することはよいか
- E：デートの際は割り勘にするべきか
- F：学校給食に牛乳は必要か

学生はグループ内で、賛成か、反対かの立場を決めた上で、主張する根拠を探し、相手にわかるように説明する、という活動に数回取り組んだ。

6) 外部講師による講義では、「話すこと」を職業にしている方（ラジオ局局長）を迎え、実際の活動を交えながら、相手を意識することや内容をまとめて話すことの重要性などについて話を伺った。

7) インタビューでは、本学の卒業生や、台湾の大学生³⁾を相手に、グループでインタビューをする活動を実施した。相手を知り、質問を準備し、的確に質問をするトレーニングを行った。特に外国人とのコミュニケーションに慣れていない学生にとっては、台湾の大学生とのインタビューは大きな挑戦であった。

3.2 日本語Bについて

日本語Bは書く力を伸ばすための科目である。「日本語A」での「話すこと」に主眼を置いた授業を経て、大学生として「書くこと」にどのように取り組むか、書く力をどのように伸ばしたいか、を意識した内容とした。2012年度のスケジュールおよびその内容は以下の通りである（カッコ内は授業回数）⁴⁾。

- 1) オリエンテーション：
授業の目的・方針を明確にする（1回）
- 2) 日本語の力チェック（1回）
- 3) メールの書き方（2回）
- 4) 書くことについて考える（1回）
- 5) 作文を書く・読む（4回）
- 6) 外部講師による講義（1回）
- 7) 文章を書く時の留意点（1回）
- 8) 資料を読んでまとめる（3回）
- 9) まとめ、振り返り（1回）

2) 日本語の力のチェックでは、現在の自分の日本語力について客観的に把握することを目的に、日本語検定⁵⁾の過去問を解いた。

3) メールの書き方、では、件名や構成などメールの基本を押さえつつ、問い合わせやお知らせ、返信など、学生が実際に遭遇しそうな場面を設定し、具体的にメールを書くトレーニングを実施した。

4) 書くことを考える、では、今までどのように書くことを向き合ってきたかを知り、今後の書くことのトレーニングについて、自分なりの展望を意識する活動を実施する。

5) 作文を書く・読む、では、「自分が経験したこと」と「自分の意見」のそれぞれに焦点を当てた作文を書く練習を行う。また、作文には読み手がいるということを意識化するために、書いた作文をお互いに読み合うという活動も取り入れる。そして、作文の作成→他人の作文を読み、その作文への感想や意見を作文にまとめる→自分の作文に寄せられた感想等を読み、返答の作文を作成、という流

れで、書く活動と読む活動を交互に実施する。

6) 外部講師による講義では、「書くこと」を職業としている方（コピーライター）を迎え、「書く」ことに対する意識や仕事をする際に重視している点などを伺う。

7) 文章を書く時の留意点、では、読み手を意識して書くことの重要性について改めて意識化する。

まとめの活動として、8) 資料を読んでまとめる、では、資料の要約や紹介を相手にわかりやすく行うためのトレーニングを行う。

どの回でも、読み手がいることを学生に意識してもらうため、書いた作文に対する学生同士のコメントや、担当教員からの添削を、強化して取り入れている。

3.3 授業事例

本節では、日本語Aで行ったある回の授業を検討する。名古屋大学高等教育センター（2005）（以下、名古屋大（2005）⁶⁾）の7つの提案と照らして、課題を発見する。

表3 名古屋大（2005）の7つの提案

提案1：学生と接する機会を増やす
提案2：学生間で協力して学習させる
提案3：学生を主体的に学習させる
提案4：学習の進み具合をふりかえらせる
提案5：学習に要する時間を大切にさせる
提案6：学生に高い期待を寄せる
提案7：学生の多様性を尊重する

授業時間：2012年4月

授業目標：グループ内で評価し合う活動を通して、自分の自己紹介を改善する。より効果的な自己紹介のための表現を知り、活用する。

教材：担当教員自作のハンドアウト

- ・自己紹介のスクリプト作成用紙
- ・グループ内の相手の自己紹介に対するコメント記入用紙
- ・自己紹介の改善案検討用紙

その他の様子：ほぼ初対面の人が多いクラス。
1 授業 42 名×4 クラス。教室は 1 机ずつ独立タイプで可動式。

流れ：

- 1) 自己紹介の重要性の説明
- 2) 自己紹介に関するブレインストーミング
 1. 自己紹介をするとき気をつけること
 2. 自己紹介で言った方がいいこと
 3. 自己紹介で聞きたいこと・聞きたくて聞けないこと
- 3) 自己紹介スクリプト作成
- 4) 考えたスクリプトを元に、グループ内で互いに自己紹介を行う。
- 5) 互いに評価表に記入
- 6) 評価表の内容を踏まえて、グループを変えて、もう一度自己紹介。
- 7) 評価表に記入
- 8) 他の人からの評価を踏まえて自己評価→提出

1 年生の 4 月の時期に自己紹介を深める活動を実施することは、授業という枠を越えて、意義があったようである。互いの名前を覚えたり、共通点を発見したりすることができ、この授業以外の活動にもよい影響を与えた、というコメントが学生から寄せられた。提案 2 にあるような、学生が協力して学習に取り組むような雰囲気作りができた。教員も、初回の授業でアイスブレイキング的な内容を取り入れたことで、学生との距離を縮められた。また、大人数の前で発言することには抵抗を感じる学生もいるが、3、4 名程度のグループであれば発言でき、学生に主体的に動くという意識を感じてもらうことができた。

さらに、学生間で評価をしあったことが新鮮だった、という感想は授業直後から寄せられた。提案 3 にある学生たちの主体的な学習を引き出す一つの方策として有効であったと考えられる。

一方で、机や椅子が可動式であることを活

かして相手との物理的な距離を縮めるような工夫ができたはずであるが、そのような指導が十分に行き届かなかった。また、学生間での話が弾んだ話題を記録するなどしておけばその後の活動の際参考になったと考えられる。活動の間、下を向いたまま一方的に自己紹介を進める学生も見受けられた。提案 7 の下位項目に「学生間の経験、興味・関心、学習スタイルの違いについて知る努力をする」とあるが、話すことが極端に苦手な学生もいるので、より細かな配慮が必要である。

4. 授業内容の検討

本章では、これまで 3 年間実施した「日本語 A」「日本語 B」の内容や学生の反応を検証し、評価できる点と今後検討すべき点について述べる。

4.1 評価できる点

(1) 学生の反応と達成度

「日本語 A」と「日本語 B」のいずれにおいても、学期の最後に、「授業の振り返り」と称して、授業で行ったそれぞれの活動において、その活動の目的は何だったのか、その活動が自分にとってどのように役だったのか、を書き出す作業を行っている。そして半期を通じて自分の力がどのくらい伸びたかについても、振り返る作業を行っている。

その「振り返り」のワークシートと、大学で行う授業評価アンケートの結果を用いて、授業に対する学生の評価を分析してみる。

まず、これらの授業の内容について好意的に捉えている学生が多い。「話すことについて少し自信が持てるようになった」「相手の目を見て話せるようになった」「以前より書くことに対する苦手意識がなくなった」のように、日本語運用力の向上に関する意見とともに「楽しかった」「友達と仲良くなれた」のような意見もあり、人間関係作りなどにも

よい影響を与えている様子が見受けられる。学生達は、この授業以外では、新入生の新学期に自己紹介をし合うような機会が極端に少ない。同じクラスといっても、どのように関係を作ってよいか迷っていた時期に、この授業で行った自己紹介の活動が効果的だったということになる。

授業での様子を見ていても、回を追うごとに課題への取り組みが早くなる、作文の量が増える、内容がより洗練される、というように、力がついていることが分かる。半期ずつ、計1年間の授業ではあるが、学生の日本語力を高める上で、これらの授業は役立っているといえる。

(2) 授業内容の定期的な見直し

「日本語 A」および「日本語 B」の到達目標は、開講してから3年間変わらないが、授業内容は、学生の反応を見つつ年度ごとに改訂している。それによって、学生がよりスムーズに、積極的に活動を行えるようになってきている。

例えば「日本語 A」の「意見を述べる」という活動は、3年間で内容を次のように修正している。

< 2010 年度 >

「話し合いで自分の意見を言う」というテーマのもと、まず3つの場面（「提案」「賛成意見を述べる」「反対意見を述べる」）の会話例を見ながら、話の進め方や使用表現などに関する問題点を指摘し、望ましい発言例を考えた。そしてその活動を踏まえた上で、ペアワーク（自分が用意した新聞記事等の内容とそれに対する自分の意見を相手に伝える）を行い、相互評価を行った。

< 2011 年度 >

前年度は“会話例の問題点を指摘し望ましい発言例を考える”という活動に時間をかけ、未消化に終わった部分が多かった。また、ペアワークの際、あらかじめ自分が話す内容を

を各自でメモにまとめてから活動に取りかかるよう指示していたが、メモがうまく作れない学生が多かった。それらの反省を踏まえ、2011年度の授業では、まず検討する会話例を1場面に減らした。またペアワークではあらかじめワークシートを用意し、項目に沿って内容等をまとめさせた。それによって、学生達は前年度より時間に余裕を持ちつつスムーズに活動に取り組むことができた。

< 2012 年度 >

前年度までの活動では“意見”というより単に自分の“感想”を述べるにとどまった学生が多かった。そのため2012年度は、「自分の立場で意見を言う」というテーマのもと、“根拠のある意見”を述べる練習を目指した。活動方法を見直し、意見を述べることの目的（相手を納得させること）や自分の意見を組み立てるプロセスを学生達がより意識できるよう、ディベートの形式を活動に取り入れた。また、限られた時間の中で実践的な活動を十分に行うため、“会話例の問題点の指摘”という導入の活動をなくし、意見を述べる際の留意点を解説するにとどめた。

学生達は、ディベート形式に慣れずやや戸惑っている者もいたが、大半はゲーム感覚で楽しみながら意欲的に活動に取り組んでいた。また、立場を固定した状況を作ることで、人間関係を気にせずに、話すことに集中できた、という学生も多かった。

(3) 学内における言語活動や学生生活を意識したシラバス作り

「日本語 A」「日本語 B」で目指しているのは、本学で学ぶ学生として必要な日本語力を向上させることである。そのため、「この授業で身につけた日本語力が、大学での授業や学生生活にどう生かせるか」ということを常に意識している。3.3節で紹介した「日本語 A」における自己紹介活動などはその一例である。「日本語 B」でも、例えば「メー

ルの書き方」を学ぶ授業では、教員への押印の依頼や事務局への申し込みなど、学生が実際にメールを書くと思われる状況を設定して練習を行っている。

また、初年次教育という本科目の役割を意識し、授業を通じて学生が大学に慣れることができるよう心がけている。例えば「日本語 A」で行っているインタビュー活動では、インタビューの相手として、卒業生と海外協定校からの短期研修生を選んでいる。先輩へのインタビューを通じて、1年生は授業や大学生活、就職活動などに関する様々な有益な情報を得るとともに、数年後の自分の姿をイメージすることができる。また、短期研修生へのインタビューでは、普段あまり接していない外国人と日本語で話す時間を設けることで、学生達は日本語を上手に話す外国人から刺激を受けると共に、大学が設けている海外研修プログラムに興味を持つようになっている。

なお、「日本語 A」「日本語 B」では、授業で配付したプリントや課題をすべてファイル（ポートフォリオ）に整理して綴じることを義務付けている。これも、資料を保管する、整理する、という、大学生として必要な学習スキルを早い段階から身につけることを意識している。半数以上の学生は、問題なくファイルに綴じる作業ができていたが、個別によく観察すると、時系列にそろえること、返却されたワークシートを望ましい場所に綴じることなどに難しさを感じる学生もいることがわかってきた。

4.2 検討すべき点

(1) 1年間を通じた継続的な活動の必要性

現在のカリキュラムでは、前期開講の「日本語 A」は話す力、後期開講の「日本語 B」は書く力の向上を目指している。話すことと書くことをそれぞれ集中的にトレーニングすることにも意義はあるが、一方で、大学での

言語活動を鑑みると、授業内での発表や報告など、“話すこと”と“書くこと”が両方求められる状況は少なくない。

例えば、現在「日本語 A」では「説明をする」という活動を行っているが、「日本語 B」でも同様の作文を書く練習を行っている。別々に行うことも重要だが、「ある事柄について口頭で説明した後、それを文章化する」という一連の活動にすることで、学生の総合的な日本語運用能力を高めることができると思われる。

また、メール作成の練習などは、本来前期の早い時期に扱いたい内容であるが、現在のカリキュラムでは後期の「日本語 B」に入れざるを得ない。情報処理系の授業でも前期開始時にメール作成の指導を行っているが、送受信の方法や転送方法、基本的なマナーが中心である。文章の内容や構成、表現については、本科目で扱う内容であると考えられる。

「話すこと」と「書くこと」を完全に分けるのではなく、柔軟な授業内容となるよう、今後見直していく必要がある。

(2) 学生の個人差への対応

授業評価アンケートで時折見られるのは、「グループ活動が苦手なので、ペアワークが辛かった」という意見である。「日本語 A」「日本語 B」では、「話す時も書く時も相手を意識すべきである」という立場に立って授業内容を組み立てているため、グループやペアでの相談や相互評価を積極的に活動に取り入れている。現在のところ、すべての学生が何らかの形で活動に参加できているが、今後まったくグループ活動に参加できない学生が出てきた場合の対処法について、準備しておく必要がある。

一方で、当初から日本語運用能力が高い学生もいる。「授業内容が簡単すぎる」という意見はこれまで寄せられたことがないが、課題を早々に済ませて時間をもてあまして

学生も時折見受けられる。2012年度の授業において、難易度の異なる2つの課題を用意して学生自身に選ばせたと、複数の学生が難しい方の課題に挑戦していた。今後はこのような試みをさらに行い、多くの学生がそれぞれ日本語の力を伸ばしていけるような内容にしていくことが望まれる。

(3) 専門科目を意識した授業内容の検討

現在の授業内容は、大学での教育や学生生活に役立つ一般的な日本語力の育成を目指したものととなっている。これは決して外すことのできない目標だが、一方で、2年次から始まる専門科目との連携が必ずしも取れているとはいえない。学生達がそれぞれの専門に即した授業を受けるに当たり、どのような日本語力が求められているのか、現時点では明らかになっていないのである。

初年次教育の段階で専門科目を意識した内容を取り入れる必要があるのか、あるとすればどのような内容をどの程度取り入れたらよいのか、今後専門科目担当の教員と連携しながら、慎重に検討する必要がある。

(4) 就職に向けて伸ばすべき日本語力

日本語検定委員会(2012)(以下、日本語(2012))によると、日本語検定を利用している大学間の比較調査の結果、大学間の得点率の差は、語彙・表記・漢字で大きい一方、敬語・文法ではあまり大きくない、という結果が出ている。これは、大学受験時の知識に重点が置かれている傾向をそのまま示していると言える。大きく差があるということは就職活動等での不利があるということも否定できず、就職試験で利用されるSPI⁷⁾に取り組む以前に、「日本語力の向上に力を注ぐべき」という指摘がなされている。

本学の学生も、語彙・表記・漢字の分野で困難を感じている例が見受けられる。さらに、本来、中等教育で十分に指導されてくるはず

の文章構成に関する知識や経験が不足していると考えられる学生もいる。これらの分野の日本語力は短期間で身につけられるものではなく、能力の向上には継続的な学習が必要だが、1週間に1時間、1年次のみ、という現在のカリキュラムでは限界がある。また、就職活動がまだ遠く感じられる1年生に、「就職活動の際必要であるから、勉強したほうがよい」という説得は効果的であるとは言えない。

そこで、考えられるのは、他の1年次科目と連動し、全体的な日本語力の底上げを図る体制作りである。

例えば、本学が推進している、学外での活動を扱う科目と連動し、話す・書くという活動を行ったり、基礎的なワープロの操作を扱う科目で、日本語の作文を電子化する作業を取り入れたり、といった工夫の可能性が考えられる。

文部科学省でも、科目間の連携・統合という考え方を取っていることもあり、日本語力の強化という視点から、本学でもカリキュラム間の連携ができないか、検討を加えることを提案したい。

(5) 授業を通しての日本語力の「伸び」の測定方法の検討

学生たちの日本語力の伸びは、指導している側には質的に理解できるが、量的に測ることは、意外に困難である。

客観的な尺度を用いて、学生が自分たちの日本語力の伸びを実感できれば、学習の動機も高まり、効果的である。たとえば「日本語検定」のような外部の検定試験を利用するという案もある。費用の問題、検定実施の問題など具体的に解決しなければならない課題はあるが、英語の授業の一つの成果として英検を利用していることを考えると、もっとも現実的な方策であるとも言える。

一方で、日本語力を一つの検定試験で測っ

でも、限られた一面しか測れないことも事実である。

現在は学生から提出された課題については、担当教員が添削し、コメントをつけて返却する作業を行っているが、十分であるとは言えない。多くの大学が、一冊の問題集を与えて、その問題集をやり終えることで、達成感を持たせようとしているが、本学の日本語ではそのような方法はとってこなかった。

今までの授業内容を振り返りながら、学生の日本語力の伸びを測る方策については、今後かなり検討をしなければならないと考える。

5. おわりに

本稿では、1年次必修科目である「日本語 A」および「日本語 B」の内容を検証した。細部に修正を加えつつ3年間実施する中で、これらの科目は学生の日本語力の向上や大学生活への導入に一定の効果を上げている。それと同時に、学生の専門や就職に結びつく形での日本語力向上の方法など、多くの課題が残されていることも明らかになった。

この「日本語」の授業は、他の講義形式の授業とは違い、自分のことを話せる、あるいは書ける授業であることを考えると、学生と接する絶好の機会であると同時に、学生間で協力した学習や学生の主体的な学習を引き出すのに適した授業であるといえる。

今回明らかになった課題を1つ1つ解決すべく、今後も学生の現状を常に把握しながら、授業の改善に努めていく必要がある。

注

- 1) 文部科学省 (2011)。
- 2) 亀田・金久保 (2009) 参照。
- 3) 本学は台湾の中華大学と協定を結んでおり、毎年夏に中華大学の学生10数名が本学を訪れ1週間程度の語学・文化研修を行っている。インタビュー活動では、この

研修で来学した中華大学生に協力を仰いでいる。

- 4) 原稿執筆時 (10月中旬) は3) メール の書き方 まで終了している。4) 以降は今後実施予定の内容である。
- 5) 日本語検定とは、日本語の総合的な運用力を測るために、6つの領域 (文法・表記・語彙・漢字・敬語・言葉の意味) から幅広く出題される、日本語を使う人を対象にした検定試験。平成19年に始まった。文部科学省後援事業。
- 6) 名古屋 (2005) は、名古屋大学の学生・教員・大学組織がよりよい教育を実現するための提案と具体的なアイデアをまとめたもので、日常の授業ですぐに活用できるアイデアと、考え方がまとめられている。よい教育を実現するためには、教員だけの努力ではなく、学生・教員・大学組織が同じ方向に向かって努力を統合していく必要があると述べている
- 7) SPI (Synthetic Personality Inventory) とは、リクルートマネジメントソリューションズが販売する適性検査の総称。

参考文献

- 亀田千里・金久保紀子 (2009)
「4年間で書く力を伸ばすには - 日本語教育コースの学生指導を中心に -」『筑波学院大学紀要』第4集
特定非営利活動法人日本語検定委員会 (2012)
『大学生の日本語力』第1期・第2期調査レポート』
名古屋大学高等教育センター (2005)
『ティップス先生からの7つの提案 (大学編)』
名古屋大学高等教育センター HP に掲載
(2012年10月17日参照
<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/seven/index.html>)
- 野田尚史・森口稔 (2003)
『日本語を書くトレーニング』ひつじ書房
- 野田尚史・森口稔 (2004)
『日本語を話すトレーニング』ひつじ書房
- 文部科学省 (2011)
『大学における教育内容等の改革状況について (平成21年度)』文部科学省調査報告

